

無名の力

— 署名／無署名の体験的・歴史的考察 —

岡本健一

はじめに

大学の同窓会から昨年秋、『以文会友 — 京都大学文学部今昔』の第1集が届いた。1955年創刊の会誌『以文』に載った歴代教授や卒業生のエッセーのなかから、約70篇が収められている。

美術考古学者長廣敏雄の「陳列館の今昔」は、文学部陳列館にあった考古学研究室の草創期を回想したもので、短編ながら興味深い事実が記されている。研究室では午後4時ごろになると、陳列館の主の浜田青陵を囲んで茶話会が開かれるので、学内の教官・学生のみならず、外部の人たちも自由に出入したこと、常連の毎日新聞京都支局長岩井武俊が考古学研究室を『カフェ・アルケオロギー』と名づけたことなど、それじたいはまなお伝説的に語りつがれる有名な話だが、イギリス流の皮肉とユーモアをとばす青陵が、自らの学問を「随筆考古学」と嘲ったりする先生だった、というくだりを⁽¹⁾読んで、思わず膝をうった。

今日、メディアの過剰な考古学報道は、しばしば「マスコミ考古学」と揶揄される。二昔前までは「新聞考古学」と批判された。直接の名付け親は、青陵の孫弟子にあたる九州大学教授の岡崎敬だが、おそらく青陵の「随筆考古学」にならったものと思われたからである。

岡崎は1978年春、大阪市立美術館の特別展「海の正倉院 宗像・沖ノ島の遺宝」（毎日新聞社共催）の記念講演で、学界の一部にみえる「安直な風潮」にたいして、こう苦言を呈したのだった。「最近の考古学調査には、

新聞を意識してチョコチョコとカッコだけつける，スタンドプレー的な安直な発掘が目につく。私は〈新聞考古学〉と呼んで戒めている」と。数次にわたる大規模な「秘島沖ノ島」の発掘調査と比べて話されたと記憶するが，そのころの岡崎の口癖でもあったのだろう。私はこれ以後，巧みなネーミングの意味をひっくりかえして借用し，考古学報道そのものを「新聞考古学」とひそかに呼んできた。

おりから新聞の考古学報道は，たがいに他紙との競りあいのなかで，しだいに過剰過大，ときに洪水的な報道に傾き，ついに東京圏の識者の間から「関西の考古学報道の仰々しさは，第三次世界大戦が勃発したかと思わせるほどだ」（評論家佐伯彰一）と指弾されるまでになった。シニア世代に入るところから，私は岡崎の苦言を反芻しつつ，社内でブレーキ役を果たそうとも心がけたが，顧みれば，逆にこれに手を貸し，しばしば煽ることさえあった。

長廣のエッセーを読んで，こうした「新聞考古学」の遠い由来を知り，いささか感慨にふけたしだいである。そして，青陵のひそみにならぬ——といえば，まことにおこがましいけれど——，年来考えつづけてきたメディアにおける「無名・匿名（無署名）の力⁽²⁾」について，こんどは「随筆考古学」や「新聞考古学」ならぬ「随筆新聞学」を試みることにした。（このたびも，恩師をはじめ諸先生・先輩方についても，文中の敬称を省略した。ご寛恕を願ひあげる）

1 署名記事と無署名記事

本邦最初の日刊紙は1870年創刊の『横浜毎日新聞』だが，それいらい新聞はジャーナリズムと活字文化の要石として重要な一翼をにない，編集・表現面でも幾変遷をかさねてきた。文語体から言文一致の口語体への文体革命，漢字制限運動の推進，戦後の国語改革，近年の縦書き文章における洋数字への全面転換などなど。そして現在進行中の重要な革新は，おそら

く無名記事をあらため、署名記事を大幅に増やしていることだろう。⁽³⁾

全記事の原則署名化

記事の署名化をいち早くとりいれたのは、地方紙では北海道の十勝毎日新聞、全国紙では毎日新聞といわれる。

十勝毎日新聞のホームページによると、1995年10月から「記事の原則署名化」をスタートさせた。「書き手の顔が見える新聞」を目指し、読者との双方向性を高めるねらいで、それまで無署名が当たり前だったわが国の新聞界に大きな波紋を投げかけた。その後、「原則署名化」は大きなうねりとなり、地方紙だけではなく全国紙にも波及した、とある。

毎日新聞は91年11月、「新聞革命」を標榜して「毎日新聞」のロゴ(新題字)から紙面全体のデザインまで一新をはかった。内容も、当然のことながら「分かりやすく、役に立つ」ことを目指して、「必要な情報を短時間で読み取れるさまざまな工夫」をこらした。書評革命と驚かせた大型書評面「今週の本棚」の登場や、漢数字から算用数字(縦組み)への切り替えが、その一例である。ついで96年には「全記事署名化の原則」をうちだした。それより20年早く、署名入りの大型コラム「記者の目」を発足させ、社論やタテマエにとらわれぬ闊達な議論をたたかわせて反響を呼んだが、全記事の署名化は、いわば「記者の目」の精神を拡充したものである。⁽⁴⁾

署名記事を原則化した毎日新聞でも、社説はいぜん無署名のままである。もちろん、「読者に親しまれる社説」にするため、筆者の名を入れるべし、との議論は早くからあったし、現在では署名入りの社説(論説)も、しばしば併載されている。また、各紙とも論説委員が輪番で担当するコラムがあって、ここでは署名の入る場合がふつうである。朝日新聞の夕刊コラム「窓／論説委員室から」の場合、数年前まで無署名だったが、「議論」のすえ署名記事に改めた、と断りがついた。

かつて社説にも署名が入った

論説委員といえば、長らく「名を奪われた」存在だった。たとえば、毎日新聞の柳原義次は、1968年の「プラハの春」当時、特派員として連日、

チェコの現地から署名入り記事を書き送った花形記者で、帰国後、社会部長を経て論説副委員長をつとめた。ある夜、後輩の私(当時学芸部記者)を居酒屋に誘った。卓上に置いた翌日朝刊一面のコラム「余録」のゲラを見ながら、「ワシは名を奪われた記者や」と、嘆くように繰り返す、なおも推敲をかさねるのだった。茫々20余年前のことだが、いまでもその様子が目に浮かぶ。

しかし、大記者が社会をリードした明治時代、しばしば社説も、論説と同様、署名入りで書かれ、文字どおり洛陽ならぬ東京の紙価を高めた。『東京日日新聞』の社長兼主筆福地桜痴(源一郎)の場合について見てみよう。

桜痴は幕末、咸臨丸で渡った遣米使節に福沢諭吉らとともに随従したのをはじめ、維新後も岩倉遣欧使節や伊藤博文の訪欧調査に同行するなど、前後10年間に4度、生のヨーロッパ文明に接する幸運に恵まれた。とうぜん、国内屈指の欧米通のカリスマとなったから、福沢とつがえて「天下の双福」といいはやされた。じっさい、全盛期(明治7~18年)の桜痴の社説・論調が「吾曹社説」「漸進主義」と呼ばれ、大きな影響をあたえたことは、同時代の新聞人矢野龍溪(文雄)のつぎの証言で明らかだ。

— 明治七八年から十七八年までの十年間が、君の全盛時代で、実にその頃の世の中の如何なる事でも、一事一物、皆[東京]日日新聞の福地君の論説によっ左右されぬものはないと云ふ程に勢力がありました。英語で論説をリーディング・アーチクルと云ふ意味は、蓋し他のアーチクルの前にも、後の者をリードするの意味から出たのであらうが、福地君の日日新聞の社説が世間を導いてこれを左右した有様は、実に世上をリードするもの、即ち世間を引廻すリーディング・アーチクルだと解釈しても恥しからぬ程に思ひました。実に前後に見られぬ新聞論説の権威でした。然る所以は、福地君は早く洋行して新しき諸制度及び事物を取調べ、当時一番の知識を有してゐられたからである。そのため日日新聞の論説が世を率ゐるやうになつたので、……欧米の

長を採らうとすれば、日日新聞の福地君の論説を見なければいけないと云ふ風に、朝野が風靡されて居つた。あの位新聞の論説が世の中を⁽⁵⁾引廻した時代は、私の生涯において見たことが無い。

無署名記事への転換の背景

それでは、なぜ近代日本の新聞界で大記者の署名報道・社説の時代から、無署名報道・社説の時代へ転換したのだろうか。

まず、メディアにとって切迫した要因として考えられるのは、政府による新聞取り締まりの強化であろう。明治8(1875)年、新聞紙条例・讒謗律の法網がうたれたあと、16年の同条例改正(いわゆる新聞撲滅法)によって、いっそう新聞取り締まりが強化された。現実に白虹事件をはじめ新聞弾圧・筆禍事件が多発する時代に入ると、いよいよ記者が素顔をさらすのが危険になった。こうした言論・報道の自由の制約が、その背景にあったとみてよいであろう。[ただし、新聞紙条例は1887年の再改定で緩和され、97年、行政権による発行禁停止が削除された。⁽⁶⁾]

新聞紙条例・讒謗律公布にともなって、明六社の福沢諭吉が「讒謗律・新聞^(ママ)条例ハ我輩学者ノ自由発論ト両立ス可カラズ」として、『明六雑誌』を廃刊したこと、新聞記者の投獄が増えたことは、メディア史で周知のことからである。これにたいして、東京日日新聞の福地桜痴は「昔日ノ如クニ思想ノ自由ヲシテ発論ノ自由ト同等ニ至ラシムルヲ得ザレドモ」と、福沢の過剰反応を批判したが、読者の投書にも、「然レドモ今ノトキニ当リ新聞記者タルモノハ亦難カラズヤ。自由発論ヲ以テ自ラ志想ヲ陳述セントスレバ、誤テ其身刑獄ニ罹リ」と、危惧する声が寄せられている。⁽⁷⁾

第2にあげられるのは、20世紀初頭、「ニューヨーク・タイムズ」にはじまる無署名記事の定着だ。受け手の読者は、これ以後、署名に煩わされることなく、ニュースじたいと向かいあえるようになり、「ニューヨーク・タイムズ」もジャーナリズムも隆盛の一途をたどったという。⁽⁸⁾署名を拒否する byline-strike が可能な、署名全盛の現代からは、想像もできないことである。⁽⁹⁾

第3に、近代工業社会に特有な匿名(無名)性である。ジャーナリストでメディア評論家の玉木明によると、近代工業社会にみられる匿名的な人間関係や構成員の代替可能性と無縁ではない。近代ジャーナリズムが〈中立公平・客観報道〉の理念を追求しはじめると、構成員を匿名化(つまり無私化)することによって、〈出来事自身のみならず物語る〉かのように現れる無署名性言語が、その要請に適ったからだ、という。そして、戦後のジャーナリズムも、「〈中立公平・客観報道〉の理念に含まれる錯覚・誤解に気づかずに、〈真実の報道〉という〈神話〉を信じつづけてきた」と説く。玉木は、その後も一貫して「無署名記事が戦後ジャーナリズムの病根である」と、きびしい批判をつづけている⁽¹⁰⁾。

玉木が、近代ジャーナリズムの特質として、この「無署名性言語」に思い至ったきっかけは、「イエスの方舟」事件(1980年前後)だった、という。『言語としてのニュー・ジャーナリズム』⁽¹¹⁾の「序 無署名性言語論—ジャーナリズムの基底にあるもの」を、玉木はこう書き起こしている。

—私がジャーナリズムについてあれこれ考えはじめたのは、「イエスの方舟」事件のころからだったと思う。この事件は、あらゆるメディアが加担して、架空の物語をつくり上げたきわめて衝撃的な事件であった。……ジャーナリズムには、いまだ私たちが認識しえていない未分明のメカニズムが隠されており、契機さえ与えられれば、いつでもそれらが作動する仕掛けになっているのかもしれない。そうであるなら、まずそのメカニズムの正体が明らかにされなければならないはずだ。そんなことを私なりに漠然と考えはじめたのである。

玉木は、ジャーナリズムに隠された「いまだ私たちが認識しえていない未分明のメカニズム」として、「無署名性言語」の実情に到達した。鋭い肯綮にあたった発見と思われるが、日本近代のジャーナリズムは、欧米のニューズペーパーを範として誕生したときから、いっぽうで「無署名=匿名(無名)性」という前近代的な要因をも受け継いでいた。日本の新聞の先駆け「かわら版」が原則、作者・版元不明の無届け出版だったことは、よ

(12)
く知られている。

前近代の無署名のメディアといえば、落書らくしよと風説(うわさ)がその最たるものだ。井上隆明『落首文芸史』によると、落書・落首・童謡(13)の大きな特質は、この匿名性が放つ不気味な「デーモン性」にある、という。新聞の匿名性も、この古代的・原始的なメディアの匿名性に遡り、名状しがたい「デーモン性」もそこに淵源しているように思われるのである。

2 無名記事の迫力——「最澄の名言論争」をめぐる

ここで、私じしんのささやかな無署名報道の体験のなかから、「最澄の名言論争」（「一隅論争」などとも呼ばれた）にかんする一連の報道・解説を例にあげ、「無名・匿名のもつ力(無署名)」の源泉について考えたい。唐突に何十年も前の蕪雑な新聞記事をスクラップブックや旧著から引き出してくるのは、ほかでもない。「無名・匿名の力」をつよく意識したきっかけが、この「一隅論争」にあったからである。僭上の沙汰、不遜のふるまいを、どうかお許し願いたい。

国民的座右銘「一隅を照らす」

天台宗の開祖・伝教大師最澄は788年、比叡山寺(別号山家さんげ、没後に延暦寺の寺号を贈られる)を建て、805年、唐留学から帰ったあと、天台宗を開いた。翌年には天台法華宗専修の奨学僧(年分学生)の養成を朝廷に申請し、認められた。さらに818年、南都仏教の手を借りず自前で僧の授戒ができるよう、大乘戒壇の設立を上請した。

そのときの教育理念をしめした文書が、最澄直筆の国宝「天台法華宗年分学生式がくしやうしき」(略して「山家学生式」)で、延暦寺に伝わる。このなかに「一隅を照らす、是すなはち国宝」という有名なことばがみえる。原文は漢文で「照于一隅、是則国宝」の8文字。

この名言は、一部の宗教人の間では早くから愛唱されたが、広く知られ

るようになったのは戦後のことだ。民主主義の風潮のもと、「職場・地域・家庭など自分のいる周りを、たとえささやかな一隅であっても照らしだし、人のため世のためになる人間になろう」という意味に解され、宗派を超えて各界著名人の琴線にふれたのだった。とくに、高度成長期さなかの1963年3月、茅誠司東大総長が卒業式の告辞で「小さな親切」を心がけようと呼びかけたところ、さわやかな感動を社会にあたえ、6月には全国的な「小さな親切」運動に発展した。そのなかで、名言「一隅を照らす」がしばしば引用され、国民的スローガンといえるほど広く受けいれられていった。天台宗でも1969年から全国で「一隅運動」を推進し、宗祖の精神の弘布につとめた。

新説「千里を照らす」の登場

それから5年後の74年、日本史家の藺田香融(関西大学)が日本思想大系『最澄⁽¹⁴⁾』(岩波書店)の校注をすすめる過程で、江戸時代いらいの通説を覆す新事実を発見した。通説では、最澄の名言の部分は「照于一隅」と読み取り、「一隅を照らす」と読み下しているが、あらためて直筆のコロタイプ写真と照合すると、原漢文の①筆跡は「照于一隅」ではなく、「照千一隅」であることに気づいた。しかも、②文意においても、「照千一隅」の4字句は、司馬遷の『史記』にみえる戦国時代の諸侯のエピソードを縮約したもので、こちらが正しいことが分かったのだ。

『史記』世家第十六などの伝えるエピソードによると、紀元前335年、斉王が魏王と会同したとき、尋ねられた。「私の国にはよく光る珠玉が10枚あります。これが国宝です。お国は大国ですから、さぞかし立派な国宝をお持ちでしょう」と。そこで、斉王は答えた。「千里を照らす有為な人材こそ、わが国の誇る国宝です。珠玉などではありません。なぜなら、良将たちが国の四隅を守っていると、千里を照らして隣国の侮りを受けません。それと比べると、いかに大きな珠玉でも、照らす範囲はせいぜい(珠玉を積んだ)戦車の周りにすぎないからです」と。魏王は恥じ入って去った。

このやりとりからみると、「一隅を照らす(=照于一隅)の大きな珠玉、是

すなはち国宝」ではありえない。「一隅を守り千里を照らす(=照千一隅の良将こそ、すなはち国宝)」であるはずだ。もし、最澄が「一隅を照らす(珠玉)」を国宝とみていたなら、『史記』の内容を取り違えていたわけで、「伝教大師にとってたいへん不名誉な話になりかねない」とも、藺田はコメントした。

藺田じしん長年、通説にしたがって「一隅を照らす」と読んできたのだが、校了直前に直筆の写真版と江戸時代iraいの積文をつきあわせて気づき、急遽、頭注と補注の一部を削って、空きスペースに簡潔に書きこんだ⁽¹⁵⁾という。

この藺田説が事実なら、衝撃的な問題提起である。さっそく同僚の横田健一が関西大学広報紙の書評欄でとりあげ、「学界の定説を覆す画期的な新説⁽¹⁶⁾」と評した。私はこれを読んで驚いた。学生時代、赤松俊秀の仏教史の講義(国史学序説)で、「山家学生式」についてくわしく教わったが、その内容とまるでちがったからだ。

和歌山市にある真宗寺院の自坊に藺田を訪ね、懇切な解説をうけたあと、古文書学の大家でもある赤松に相談した。赤松は「古文書学の問題というより、漢文をどう読むかの問題だね。中国文学の吉川幸次郎先生のコメントをいただくがいい」とアドバイスされた。当時、吉川の権威は(少なくともマスコミの目には)最高裁判所に等しく、その判断は学界の最終審に近かったから、もし「ダメだね」と断定されたら、これに抗することはできない。しかし、新説の論理は、虚心にトレースすれば、きわめて明快かつ重大な内容とわかる。しかも、社会的な関心も高い名言である。不問に付すのは、あまりに惜しい。そこで、天台宗の反論だけをつけ、参院選(1974年7月7日)の開票結果が出たあとの7月9日付け朝刊で報道した。

大反響をよぶ

扱いは社会面のトップ記事、横見出しは「最澄の名言は誤りだった」。当時はまだ、文化記事で新聞の一面(総合面)に出る例は、まずなかったから、当然のごとく社会面で扱われたのだ。藺田の母堂は、「火事や殺人事

件と同じところに載って恥ずかしい」と嘆かれたそうだ。むろん、署名はなし。まだ一般の報道記事に署名の習慣がなかったころである。⁽¹⁷⁾

反響はすさまじかった。古文書学の大家・佐藤進一は岩波書店に駆けこみ、毎日新聞の綴じこみを見た。中国古典に明るい土岐善麿・元国語審議会会長からは直接、毎日新聞大阪本社へ電話で照会があった。哲学者たちも論争に加わった。参院議長河野謙三、元大阪府知事・左藤義詮代議士、経済評論家・斎藤栄三郎参院議員をはじめ、多くの政治家は「(陽のあたらず)社会の一隅(隅々)までも照らす」の意味にとって、自らの政治姿勢としていたから、衝撃も大きかった。延暦寺にあらためて取材すると、「あんな恐ろしいこと、よう書かかりますな」と非難された。天台宗では勸学院会議が急ぎ開かれた。印度学仏教学会と天台学会の各大会で天台勸学の福井康順(大正大学学長)がきびしく反論した。

じつはこの問題、東京新宿にある天台宗の末寺・安養寺の木村周照が、かねがね「照千一隅」と読むべきことを提唱していたのだが、末寺の学僧より勸学院を代表する「文学博士」の見解がはなから重んじられ、新説は一蹴されて表面化しなかった、と聞く。⁽¹⁸⁾

先の吉川幸次郎も、赤松俊秀・出口常順(四天王寺管長)とともに、「学生式」の複製本をみながら検討し、「新説の解釈でよい」とコメントした。やがて翌年、中国仏教会の趙樸初会長から「昭和の唐決」が木村のもとに届いた。平安の昔、教義上の問題が生じると、遣唐留学僧が唐の仏教界に質して解決(唐決)をはかったが、その故知にならって、訪中した木村らが中国仏教会に照会し、回答を得たという。

それから25年、前勸学院長の久保良順(妙法院門跡門主)にインタビューした。もともと木村の「照千一隅」説に理解を示した少数派だったが、時移り教学上の最高責任者の地位にもついた。門主は「〈照千一隅〉の堅固な道心こそ、大師のいう国宝だ。〈照千一隅〉は大師の言葉でも精神でもない」と明言し、事実上論争に決着をつけるのだった。⁽¹⁹⁾

なぜ、これだけの反響をまきおこしたのか。つぎの4点があげられよう。

- ①伝教大師の名言
- ②岩波書店の権威
- ③毎日新聞の信用
- ④時代精神の潮目

「時代精神の潮目」とは、折りから、市井の「一隅を(も)照らす」人物を敬愛する、小市民的な平等社会から、「千里を照らす」英雄を待望する、躍動的な競争社会へ、時代の気分が変化しかかっていたことをさす。

その後、私はこれらに加えて

- ⑤記事の無署名性

がある、と考えるようになった。白面の記者の署名は、このさい無きにせず。むしろ、無署名なればこそ、「毎日新聞はこれを正しい学説とみて、社として報道する」という強い姿勢が感じられるからだ。

しかし、「背後に新聞社の力があるから」といっても、それだけではない。無署名(無名・無主・無記)には古来、別のはたらきがある。網野善彦が「無主の物は神の物」⁽²⁰⁾と指摘したように、無署名の記事もまた、「神の物に属する」らしいのだ。もとより明示的なものではないけれど、新聞社や出版社の信用・権威だけではなく、「記事にこもる無名・匿名性の力」を感じずにはおられなかったのである。

3 匿名のメディア：落書・歌謡・うわさ

無署名・匿名の言説の代表は、先に触れたとおり、落書と風説(うわさ)である。新たに最近、インターネットの「掲示板」が加わった。これまでに新聞報道の無署名性と落書の関連について論じた人は、かならずしも少なくないが、「掲示板」と落書の関係については、鈴木淳史『美しい日本の掲示板』やネット上でも論じられ、「二条河原落書」が「2ちゃんねる」の元祖と見立てられている。卒業論文でもとりあげられた⁽²¹⁾。

美術・工芸における署名の発生

いったい、創作物に名をつけるのは、いつからはじまったのだろうか。さいわい、美術史の分野については、「芸術家の署名」と題する水野敬三郎・戸田禎佑・高階秀爾の専論がある。それによると――⁽²²⁾

日本の仏像彫刻の場合、平安時代まで、仏師として仏像に自署するといふより、造像発願の願文のなかに、願主とともに「仏師＝僧」の一人として、名を連ねた。平安末期に至って興福寺の僧が力をますと、運慶ら奈良仏師たちも自信をもち、定朝様式に反逆して新様式をうちだし、仏像に自署するようになった、⁽²³⁾という。

中国では、10世紀の五代以後、仏画・山水画に控えめな隠し落款が記されるが、本格的な署名は、北宋末の徽宗皇帝が自らの作品に大きく署名を残すようになってからで、この時代の文人画の勃興とも軌を一にする、という。

西欧では、前7世紀の古代ギリシアまでさかのぼり、壺絵に署名の例がある。ただし、画家より陶工の名が多い。中世には署名作品がほとんどない。署名が復活するのは13～14世紀、ゴシック期のイタリアで、つぎのルネサンス期になると、急増する。おもしろいことに、ミケランジェロの署名例は、「ピエタ像」の1点だけ。レオナルドの主要作品にも署名はないという。署名の習慣が定着するのは17世紀以降だ。

ところが、考古遺物のうち、鑄造・鍛造品の署名例は、日本列島内にかぎってみても、古くまでさかのぼる。なかには3世紀なかば、卑弥呼が魏王朝から贈られたという三角縁神獣鏡の例さえある。畿内を中心に宮崎から群馬までの各地で出土する三角縁神獣鏡は、中国から舶載された、いわゆる「卑弥呼の鏡」か、日本列島内(おそらく卑弥呼の膝元)で作られた「国産鏡」か、長年論争がつづいているが、もし「国産鏡」だったとすると、「陳是(=氏)作鏡」の銘文は、渡来系の鑄物師集団「陳氏」が堂々、自署した最古の例となる。年号がそのまま制作の実年代を表すとしたら、「景初三年」銘のある三角縁神獣鏡や平縁神獣鏡は239年を示す。

また、「^{フカタケル}獲加多支鹵大王(雄略天皇)」の名を刻んだ2口の刀剣(国宝)のうち、埼玉稲荷山鉄剣銘(471年作)には鍛造者の名がみえないけれど、江田船山大刀銘には「作刀者伊太加(?)」と「書者張安」の名が銀象眼されている。張安はおそらく渡来系の漢人とみられる。

瓦はさすがに多く、下野国分寺跡(8世紀半ば)出土の瓦から「真依」など瓦工名がたくさん見ついている。しかし、これも、上の「芸術家の署名」にしたがえば、職人意識にもとづく署名というより、作善のための自署に近いものかもしれない。

同じ焼き物でも、美術品としての陶磁への署名は、時代が下がる。プロ作家では17世紀後半、京焼(色絵磁器)の元祖野々村仁清が最初という。

文芸の署名

こうしたなかで、文芸だけは様子がちがう。『万葉集』の4500首近い歌群は大半、作者名がわかっている。磐姫皇后(仁徳天皇の后)や雄略天皇の御製と伝える最古の長・短歌も含まれる。『記・紀』の歌謡のなかには、神話時代のササノヲの神婚歌——八雲立つ 出雲八重垣 妻籠めに 八重垣つくる その八重垣を——や、英雄時代のヤマトタケルと火焚きの翁との連歌——新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる／かがなべて 夜には九夜 日には十日を——のように、(仮託にせよ)作者名の伝わるものもある。

ただし、古代・中世歌謡はほとんどが作者不詳を一大特徴とする。この歌謡の「無名性」について、詩人の大岡信は1994/95年、パリのコレージュ・ド・フランスの連続講義で、つぎのように再評価した。すなわち「近代日本のロマン主義は、歌謡の無名性の中に、いわば摩滅した個性、遊戯的な恣意性、陳腐な前近代性を見出し、自我意識確立への欲求と縁遠いがゆえに、まじめな学問の対象とはしにくいと見なしたのです」と批判するとともに、「作者の著作権を優先的に保護することをもって当然とする近代の考え方を、いわば嘲笑するような自由奔放さ、それが歌謡の本質的屬性であり、その輝かしい特徴でさえありました」と、無名性を積極的に肯定したのである。⁽²⁴⁾

日本中世史の研究を革新した網野善彦も1978年、『無縁・公界・楽——日本中世の自由と平和』のなかで、一部の中世史研究者の見方を、つぎのように批判した。「〈私有〉〈有主〉の論理の発展・深化のみに歴史の〈進歩〉を見出し、〈無所有〉〈無主〉の論理に、おくれた、克服さるべきものしかみようとしない志向が、強靱に根を張っている⁽²⁵⁾」。

網野は、「中世史研究者の見方」から雑草のように強靱な生命力をもつ「無縁」（無主）を擁護し、先の大岡は、「近代の考え方」を嘲笑する自由奔放な「無名」を称揚する。二人の批判は驚くほど酷似している。網野は、さらに巻末の「人類と〈無縁〉の原理」の章を、つぎのように結んだ。

——文学・芸能・美術・宗教等々、人の魂をゆるがす文化はみな、この「無縁」の場所に生れ、「無縁」の人々によって担われているといってもよからう。……古代の美術・文学等々が、いまもわれわれの心に強く訴えるものをもっていることも、神話・民話・民謡等々が、その民族の文化の生命力の源泉といわれることの意味も、「無縁」の問題を基底において考えると、素人なりにわかるような気がするのである。

落書・風説の無名性

私は、落書や風説(うわさ)の無名性についても、大岡のいう自由奔放な「無名」性や、網野の説く原始らしい「無縁」性に、通じる積極的な意味がある、と考える。

周知のように、「落書」は現代の落書き(楽書き)とは異なる。落書は、落とし文ともいい、無名=匿名の文書で、橋の上や袂、河原から寺社の境内・門前、町の辻、そして市の中などに落とされたところから、この名がある。しかし、単に人通り・人目の多い場所に落とされたのではなく、心理的にはあの世とこの世の〈境界〉に落とされ、また、無名であるがゆえに、神意を宿したものとみなされた。目的は、不正を暴き、政治を批判し、権力・権威を風刺・嘲笑し、ときに求職・求愛するためだ。

「童謡」^{わさうた}も似ている。多くは無邪気な童男・童女たちの口をついて出て

くるところから、この名がある。また、中国でも日本でも古来、「天に口無し、人をして語らしむ」（『平家物語』一）と信じられ、為政者は恐れ謹んで、これに耳を傾けた。

ここでは、中世・東寺の高僧のスキャンダルを暴いた寺内落書(1463年)とその結末を記す。もちろん、無署名だ。

一、ホウセウイン(宝勝院)ランキヤウ(乱行)ノ事、イセンタヒタヒ(以前度々)のラクセウ(落書)ニ、ヲヨヒ候所ニ、……ミナミナ上サマタチノヒキキ(鼠兎)ニヨリ、イマニ御サタ(沙汰)ナク候、クレクレクセコト(呉れぐれ曲事)ニテ候、……(下略)

東寺のトップが下働きの人妻を住房につれこみ、女の体を弄う(触る)などの乱行があった。たびたび落書で告発したけれど、寺の上層部がかばって処罰しないのは、けしからん。これでは伽藍の地を失うのも同じ。ご祈禱より糾明が先決だ——という内容。さすがに東寺側も放っておかず、弾劾裁判のうえ、破戒僧を追放した。女も恥じて逐電⁽²⁶⁾した。

井上隆明の『落首文芸史』は、落書・落首の特色の一つとして、「匿名批評によるデーモン性」をあげる。ただし、「所詮は背面側面から抉る匿名批評、無記名の投書手段にすぎない。内幕通、文芸愛好の知識階級の所産だけに、その手段は低俗にすぎよう」という。この評価については、異論もあろう。落書・落首は、いまを時めく人間の、不正・不倫・恥部をあてこすって溜飲を下げる体ものにかぎらない。無記名の投書が大きな力を発揮するケースがあるからだ。上の寺内落書事件も、無記名の投書(落書起請)で詮議しようとした結果、目撃者が現れて一挙に解決したのだ⁽²⁷⁾た。

聖なる落書起請

つぎに、「落書起請」が特別な取り扱いを受けた例に注目しよう。1310年のある夜、法隆寺に強盗が入った。犯人にかんする情報がまったく得ら

れないので、周辺17カ所の村々に無記名投書(落書起請)で情報を寄せてもらうことにした。結果は意外、法隆寺の僧2人が犯人とわかった。ただちに犯人検挙のため、村人たちが同心合体して出向いたが、このとき、落書はうやうやしく捧げもたれた。この点に着目して、酒井紀美⁽²⁸⁾はいう。

— 神の照覧するところで、神を立会人にして実施された「落書起請」には、「落書」を投じた自分たちの思惑などをはるかに超えた、神の意志が投影されている。それゆえ、「落書を捧げる」ことによって、自分たちの決定にも行動にも神のうしろだてが厳として存在するのだ、と誇示しているのである。

酒井によると、「神のうしろだて」は、「落書起請」だけにあるのではない。落書は一般に「その匿名性ゆえに力を発揮する。〈天狗の落とし文〉などともいわれて、人間ではないものの意志を背後に背負っているかのように受けとめられていた。それだけに、無視できないある種の力を秘めた矢として、〈落書〉は、くりかえしくりかえし(中世の)寺の内部から放たれつづけた」。また、「落書」を記した「高札」が河原に立てられる。「いったい誰が立てたのかわからないが、匿名性ゆえに生じる力というものがある。〈京童の口遊〉という別の力も存在する。…人間を超越した絶対的なものの意志やメッセージがこめられている」とみなされた。⁽²⁹⁾

4 無名とは何か

このような「無名性・匿名性」が発するデーモニック・絶対的な呪力とは、そもそも何に由来するのだろうか。なぜ、無名・匿名が神意を宿すのだろうか。

さきに、井上隆明の『落首文芸史』にもとづき、落書・落首の特質として①「匿名批評によるデーモン性」をあげたが、井上はこのほか、②「時事風刺・反体制の俗文芸」、③「暴露・批判と嘲笑・滑稽性」、④「アジュール(不可侵領域)性」を指摘している。私はこれらに、⑤「匿名仕立てによ

る仮託性」を付け加えたい。

落書・落首の仮託性

落書は江戸時代以後、遊戯的な俗文芸にかたむくが、それまでは匿名の個人(無名氏)が、寸鉄人を刺す辛辣な警句でもって、権力と世間を風刺・嘲笑し、弾劾・告発し、ときに憂憤・述懐を記す形式をとった。そのさい、無名氏は単なる個人ではない。何者かに仮託されると、それに成りきって作るのである。寛政改革(1789～93年)を批判して大江戸中の喝采を博した狂歌について、仮託性の名残をみてみよう。

世の中に蚊ほどうるさきものはなし ぶんぶといふて夜もねられず

このとき、「作者は御徒士で天明狂歌の旗手、蜀山人(四方赤良)＝大田直次郎だ」との噂がたった。江戸で隠居していた元平戸藩主の松浦静山によると、蜀山人は組頭に呼びつけられて詰問されたので、こう答えた。『『何も所存は御座無く候。ふと口ずさみ候迄に候。強て御尋ねとならば、天の命ずる所なるべし』と言ひければ、(組頭も)咲ひて止みけるとぞ」。当の蜀山人も、随筆集『一話一言』で「是レ大田の戯歌ニアラズ、偽作也。大田ノ戯歌ニ時ヲ誹リタル歌ナシ、落書躰ヲ詠シ事ナシ 南畝自記」と否定した。よく知られたエピソードだ。⁽³⁰⁾

この一件について、『落首辞典』の編者鈴木棠三は、「眉唾な話で、もしこのように不遜な答弁をしたならば、到底罪科を免れず、笑って済ます上役などいるはずがない。……その経歴を飾る英雄化伝説として登場したもので、講談的伝記の一節にすぎない」と一蹴した。蜀山人には筆禍の前歴があり、危ういところで死罪を免れたのだから、リスクを犯すはずがない。そう断定した後から、「作者は…やはり蜀山人その人だろうと臆測する」と、鈴木はこだわっている。⁽³¹⁾

引用を重ねたが、蜀山人の弁明が、かりに(寛政改革後に生まれた)英雄伝説であるにせよ、世間は狂歌界のカリスマ・蜀山人の作と取り沙汰(仮託)し、本人は天命(天の声)とうそぶいているところが、おもしろい(後述)。

ちなみに、この〈口ずさみ〉も、いまの語感のように、歌謡の一節を小
声で歌うことではあるまい。瀬田勝哉が「中世の口遊^{くちずさみ}」について説いた意
味に近いようだ。すなわち、中世の〈口遊〉は「人間の力では制御できず、
なりゆきのまま……人意を越えて口から口へ勝手に広がっていくという、
それ自体生きもののようなもの、〈たましい〉のあるもの^(補注)」であったから、
蜀山人も強いて問われれば、「天の命ずる所」と答えるほかなかったわけだ。

偽書の仮託性

この仮託性は、偽書の世界でもっともあらわになる。中世には、聖徳太
子をはじめ聖武天皇・弘法大師・伝教大師ら、オーラを発する古代の著名
人が、予言書『未来記』などの御記文(偽書・仮託書)を著した、と仮託さ
れた。鎌倉時代の人物のなかから、これら古代の列聖に加えられたのが、
歌聖・藤原定家である。

定家は生涯において膨大な歌作を残すとともに、『源氏物語』をはじめ、
あまた古典籍の写本を作った。定家独特の癖のある書体で書き写したから、
だれの目にも定家筆写本と判別できるけれど、近年の研究では定家の工房
で、定家流の書体を模して筆写したものが多い、という。定家の署名は、
それら写本群の奥書に残る。

これとは別に、中世をつうじて定家が神格化されると、定家を尊崇し定
家に成りきった「プソイド定家(pseudo-Sadaihe=偽-定家)」が現れて、数
多の仮託書・偽書を作った。川平ひとし「署名する定家、装われるテキス
ト——仮託書論の一視角⁽³²⁾」によると、そこには定家の最後の官職名にちな
んで「前中納言藤原朝臣」と署名された。これが「巨匠定家の代名詞」と
なり、プソイド定家たちは「前中納言」と記すことによって、真正性をも
りこもうとした、という。

偽書の代表作『未来記雨中吟』のなかで、プソイド定家は「雨中吟」17
首を書き写したあと、奥書につぎの遺戒を記した。

此風体をさかりに好み詠まむ時は、歌の道はやはやとすたるべき世

いたれりとなむ知るべし。ゆめゆめまなぶべからざる風体也。此頃もかやうの姿おのづから見え侍りし。仍後学の為にしるしとむるところ也。
前中納言藤原朝臣 判

上の偽書の遺戒と落書・落首を比較すると、落書・落首が、偽書の場合と同様、無名の誰か／何か(権威)に仮託したものであり、それに成りきって書いていることに気づく。先の寛政改革期の落首(狂歌)とあわせて比べよう。

	権 威	署 名	作者・筆者(仮託の主体)
偽 書	歌聖藤原定家	前中納言藤原朝臣	プソイド-定家
落 首	狂歌名手蜀山人	無 名	蜀山人(世間)
	天 命	無 名	プソイド-天命(蜀山人)
落 書	X	無 名	pseudo-X

もとより、落書・落首は古代歌謡のような無名の人びとのコラボレーションではない。問題は「無名の権威X」の正体である。これを、網野にしたがって「無主の物は神の物」と呼ぶか、蜀山人にならって「天命」ととぼけるか、呪的なものは「神意」と片づけるか、いずれかに決めれば、簡単である。その点、彼のエピソードを書き留めた松浦静山は、神秘めかさず「落書の類、埒もなきことながら、これにてその世を観るには適切なることぞ多かり」と記している⁽³³⁾。合理的な精神の持ち主だったらしく、「民意をうかがう参考資料」とみていたのだ。

実名を避ける習俗

つぎに「名」そのものがもつ力(実名・仮名の力)とは別に、名を欠くゆえに現れる「^{けつめい}厥名の力」について考えよう。いわゆる「^{けいひぞく}実名敬避俗(諱の習俗)」からアプローチする。

世界の諸民族には、実名を口にしたり書き記したりするのを憚る習俗、いわゆる「実名敬避俗」のあることが知られている。ところが、ひとり日

本では「古来、実名敬避俗がなかった」と、江戸時代の本居宣長いろいろ長らく信じられてきた。「古来の日本には実名敬避の習慣なし、忌み名は本邦固有の習俗にあらず、外国の俗なり」「古代における名はことごとく美称であり、これと呼ぶことは、(むしろ)これを尊む所以である」と主張した。一見、敬避俗があるようにみえるが、のちに唐の礼制が採り入れられたもので、古来の習俗ではなかった、というのである。⁽³⁴⁾

この宣長説に異議を申し立てたのが、明治大正の法学者穂積陳重だった。1919年、論文「諱に関する疑」を発表し、これを改訂増補して『実名敬避俗研究』をまとめた。⁽³⁵⁾

穂積は内外の史資料を集めて検討のすえ、こう結論した。「古代日本には実名敬避の習俗があったが、礼制としては未発達だった。その後(孝徳朝、桓武朝)受け入れた唐の礼制に覆われて、文献に顕著な事跡をとどめなくなった」と。そして、宣長をつぎのように批判した。

— 近世にいたって国学が勃興するまで、我が国固有の思想・民俗を考究する風はなく、物事はすべて中国を基準にして観察する学風が支配的であったから、この学風に対して警醒し、「からごころ」を戒めた学者も、諱の礼制が中国から輸入された事実を見て、その上翻って我が国の古俗に思いをいたすことなく、直ちにその反対を推測して「忌み名」の習俗は我が国固有のものではないと論断したものである。

穂積は「疑う者は断ずる者ではない。訴訟人は裁判官にはなりえない」と、法律家らしく禁欲的な態度を崩さなかったが、「実名敬避の習俗は本来大和民族にも固有のもの」であることは、「蓋し然らん」「或いは然らん」というところまで証明できたのではないか、と自信を示した。

今日、穂積の「日本古代の実名敬避俗」説は広く支持されているようである。これを受けたかたちで、豊田国夫が『名前の禁忌習俗』を発表している。⁽³⁶⁾

さて、穂積によると、この「忌み名」=実名敬避の習俗はタブーの一種

であり、全人類に共通する普遍的な現象である。「忌み」は神聖・忌避・禁戒の三つの意味を兼ねた。とくに、原始社会では首長の権力・尊厳を維持するため、タブーの禁忌によって、君主を一般人民から離隔した。そこから君主権不可侵の観念も生まれた。

タブーは、①接触のタブー(触覚)、②観視のタブー(視覚)、③称呼のタブー(聴覚)にわけられる。触れたり近づいたりすることは、むろん、仰ぎ見たり隙見することも禁じられた。さらに、声をもって近づくことも、首長や尊貴の名を唱えることも諱避された。実名敬避俗の発生した理由だ。これが一般にも及んで、他人の実名を唱えないのが、礼となったという。

王の実名を敬避するため、名を秘密にして不可侵を保障しようとした。やむなく名を唱えるときには、陛下・殿下などの避称や Majesty, Highness などの尊号を用いた。文字で書くことは、いっそう尊厳を冒すとみなされ、他の文字から離して書いたり(闕字)、改行したり(抬頭)する敬避書法(避書俗)が発達した。

旧約聖書の神ヤーウェの名が、実名敬避俗の典型だ。古代イスラエル人も近代のユダヤ教徒も、「モーゼの十戒」によって神の名を唱えることを固く戒められたから、神の名を表す YHWH の文字(四聖子音)のみ伝わって、ついに正確な発音は19世紀になるまで忘れられた、⁽³⁷⁾という。

J. G. フレーザーの『金枝篇』は、神や王の名にかかわる古今のタブーを集めている。エジプト神話の主神ラーも、実名を胸の奥底に隠し、決して神々にさえ明かさず、おかげで全能を保つことができた。ところが、女魔法使のイーシスが策をめぐらせ、ラーの名を胸底から抜き取るとともに全能を奪い、大女神になり代わった、⁽³⁸⁾という。古代ローマでは都市の守護神の名が極秘にされた。

こうしてみると、文字で表す場合、最大最高の敬避法は、空白=無名にしておくことであろう。されば、この最大最高の敬避法で遇せられるのは、何人なのか。古代オリエントの神々と同様、おそらく人間を超越した絶対者であろう。「なにごとのおはしますかは知らねども かたじけなさに涙

こぼるる」と詠んだ、西行法師の神観念と通じるところがあるように思われる。すでに無名＝空白に「神・神意・天命が宿る」と、古人が感得していたことは、先にみた。現代のわれわれには、空白のなかに神を感じることはできなくなったけれど、迂路をたどったすえ、「神を見る」古人の心性にやや近づけたかと思う。

むすび—— ニュース観の変化とともに

ひるがえって、新聞における「無名・匿名(無署名)の力」は、何に由来するか、という最初の問題に立ち返る。それは、神秘的な落書・落首や童謡のもつ「無名」の力、妖しい偽書の放つ「匿名」の力、さらに、禍々しい現代の怪文書に漂う「無名・匿名」の力と、通じるところがある。一言でいえば、個人の力を超えた「神意・天命」であり、(もう少し現代の感覚に近づけるならば)社会を支配している「道理」であろう。

ニュース：神が知るしめす時代

しかし、メディア史を開くと、もっと端的・直截に「ニュース(出来事)そのものが神の摂理のあらわれ」とみる、神学的なニュース観がかつて支配していた。D. J. ブーアスティンは、名著『幻影の時代——マスコミが製造する事実』の第1章「ニュースの取材からニュースの製造へ——疑似イベントの氾濫」⁽³⁹⁾で、こう述べている。現代(1930年代以後)でこそ、読者の欲望に応えようとして、マスコミの製造した疑似イベント(pseudo-events)とそのニュースが氾濫しているけれど、19世紀以前は、この世でおこる出来事とそのニュースは、すべて神の思し召しによるものと信じられ、読者はそれに自足した。したがって、ニュースがなければ、新聞を出す必要がなかった。

ブーアスティンは、つづけていう。

——アメリカ最初の新聞《外国、国内の公共の出来事》が一六九〇年九月二十五日、ボストンで発行された時、ひと月に一度規則正しくニ

ニュースを提供するというのがその建前であった。しかし、「事件がたくさん起こった場合には」ひと月に一度以上の割合で発行されるかも知れないとハリスは説明した。ニュースを作る責任はまったく神——あるいは悪魔——のものであった。新聞記者の仕事は単に「われわれが知ることできた重要な出来事」を記述することであった。

出来事イベントのこのような見方の背後にあった神学はまもなく消え失せたが、ニュースについての古い考え方はずっと後までつづいた。

これを裏づけるため、ブーアスティンは、具体的なエピソードを3例あげた。

- 1 ジェームス・バートンは、一八八六年にこういつている。「事件を正確に、しかも迫力をもって記録するところの熟練した、良心的な新聞記者は神の声そのものである」と。
- 2 南北戦争 [1861～65] 以前のことであるが、新聞が部屋に持ってこられると、「どうか、ちょっと読ませてください。神さまがいかにかに世界をしろしめしているかを、私は知りたいのです」と、いつもいつていた南部洗礼派教会の牧師の話は、有名である。
- 3 十九世紀の生んだアメリカのもっとも偉大な新聞編集者の一人であるチャールズ・A・ダナは、《ニューヨーク・サン》が犯罪を大々的に報道することを弁護して、次のように述べた。「神の摂理が許したもうた出来事を報道しなくてもよいほど、私は自分を偉いと思つたことはない」

これと同じ神学的世界観を、同時代のイギリスの詩人 R. ブラウニングが歌ったことを、思い出される方も多だろう。上田敏の名訳でおなじみの「春の朝」(『海潮音』1905)はまさに同時代、1841年の作品だ。

時は春、／日は朝、／朝あしたは七時、／片岡に露みちて、／揚雲雀なのりいで、／蝸牛枝に這ひ、／神、そらに知ろしめす。／すべて世は事

も無し。

牧師にかぎらない。1844年、S. モールスがワシントンとボルティモア間で通信実験に成功したとき、感極まって、スポンサーのA. ヴェイルに「What God hath wrought. (神のなせし業)」と打電したエピソードは、よく知られている。

ちなみに、百年前の第4詩集『白羊宮』(1906)で明治詩壇に名をはせた薄田泣菫⁽⁴⁰⁾も、大阪毎日新聞の連載コラム『茶話』⁽⁴¹⁾で、同じような神学的ニュース観をなんとか紹介している。その1例をあげると――

「米大統領」 大正5(1916)年12月10日付 夕刊

――米国の大統領ウエルソン氏は、二度目の今の夫人を迎えてからは日曜日曜日に一度だつて教会へお参りするのを忘れたことが無い。……[その]牧師はいつも判り切つた事を長つたらしく喋舌り続けるので名高い男だつた。

その日も牧師はフライ鍋の底を搔くやうな声をして、神様の吹聴を長々と述べ出した。何でもその説によると、地面(おべた)に起きる事も、海の上で持上がる事も、何一つ神様の摂理で無い物はない。近ごろ米国の近海で起きた独逸の潜航艇問題の如きも、みんな基督が心あつて行つた事だといふのだ。……

民俗学・神道学の折口信夫も、独得の「みこともち」論から、天皇は天神のみこと(呪力ある神秘的な御言=神言)を持ち伝えるミコトモチである、と論じた。その延長で考えると、新聞もみこと(神言)を読者に仲立ちする媒体(メディア)、すなわちミコトモチとなろう。上の神学的ニュース観と通底する。⁽³⁹⁾

ニュース：マスコミ製造の時代

しかし、それらはもとより牧歌的な19世紀のニュース観であって、1960

年代、ブーアスティンの見出したとおり、現代は「マスコミの製造する事実(疑似イベント)が、ニュースとなって氾濫する」幻影(イメジ)の時代となった。科学、とくに医療技術が、神の摂理を超えて発達したように、メディアの報道も、神の知ろしめす範囲を超えて、幻影をふりまき、過大な読者の要求にこたえるようになって、すでに久しい。

良心的な新聞記者が神の御手となって、「神の声」を書記し報道するとき、署名は不要であったろう。だが、神なき現代、神(無名)に代わる署名が新聞記事に求められるのは、時代の当然の要請なのであろう。M.ウェーバーの説いたごとく、近代社会の特徴が、呪術からの解放と合理主義の精神にあるならば、⁽⁴³⁾「神の声」や「神の手」を予感させる無名記事は、もはや反時代的になるからだ。されど、新聞記者として神言を読者に伝えるミコトモチの時代を体験した世代にとっては、そこになお一抹のノスタルジアを覚え、不思議な昂揚感を思い出さずにおれないのである。

(平成18年1月完成稿、2月26日校了)

注

- (1) 『以文会友——京都大学文学部今昔』第1集 2005 京都大学学術出版会。たしかに、浜田は青陵のペンネームで『百済観音』をはじめ『希臘紀行』『橋と塔』などの名随筆・紀行文をものしたけれど、もちろん謙辞であろう。草創期、全国唯一の考古学教室を主宰して、飛鳥の石舞台古墳をはじめ、朝鮮半島をふくむ各地で学史に輝く重要な発掘調査をおこない、『京都帝国大学文学部考古学研究報告』全17冊を刊行するとともに、大学内外の研究者を多く育て、考古学の基礎をきずいた。
- (2) 「匿名」といえば、今日ただいまメディア界で喫緊の課題となっている、犯罪報道にかかわる関係者の実名/匿名(仮名)の問題を、まっさきに思い浮かべられよう。以下の小論でいう「無名・匿名」は、新聞報道で記者名を記さない「無署名」記事をさしている。
- (3) 新聞・週刊誌・放送の異分野に身を置いて豊かな経験と識見をもつ北野栄三は、つぎのように指摘する。明治時代の大記者について、現代の新聞社では語り継がれず、縁遠くなった。「新聞記者が〈無名〉を原則とするようになったからといっても、ほかの世界とくらべると、それは少し不釣り合いに見える」と。〈無名〉性のもたらした、意外な側面であろう。また、〈署名〉のあった明治のような「骨太な」な言論が消えた、ともいう。『メディアの

人々』2000 毎日新聞社。

私の身边でまさきき署名記事への転換を主張し行動したのは、朝日新聞の科学記者飯沼和正である。1970年ころ、「日本の新聞に署名記事をふやそう」と題するパンフレット(講演レジュメ)を作って配布するとともに、科学記者/大阪大学記者クラブに呼びかけて研究会を開いた。

- (4) 『毎日の3世紀——新聞が見つめた激流130年』下巻 2002 毎日新聞社
- (5) 久保田辰彦(辰一郎)編 太田原在文執筆『廿一大先覚記者伝』1930大阪毎日新聞社より引用。小山文雄『明治の異才 福地桜痴—忘れられた大記者』中公新書 1984。なお、久保田は東大史学科(国史専攻)卒業後、大毎に入社、戦前は歴史ジャーナリストとして活躍し、戦後は毎日旅行社長を務めた。主著『いはゆる天誅組の大和義拳の研究』1941 大阪毎日新聞社などがある。
- (6) 佐々木隆『メディアと権力』日本の近代14 1999 中央公論新社
- (7) 松本三之介・山室信一編『言論とメディア』日本近代思想大系11 1990 岩波書店
- (8) 玉木 明『言語としてのニュー・ジャーナリズム』1992 學藝書林
- (9) もっとも、記者の署名については、現代のアメリカにおいても冷ややかな見方がある。byline strike に関連して、たとえば、つぎのような経済アナリストのコメントが紹介されている(The Boston Globe 2004年6月17日付け)。「広告主にとって気になることは、ただ一つ、発行部数、発行部数、発行部数だ。なんなら、ミッキー・マウスのバイラインを記事の上に置いてもいいんだ。彼らは気にすまい」“The only thing advertisers care about is circulation, circulation, circulation”, Edward J. Atorino said. “You could put Mickey Mouse’s byline on stories, and they wouldn’t care”. By Christopher Rowland, Globe Staff
- (10) 玉木 明『ニュース報道の言語論』「無署名性をまもって現象する言語の形態」1996 洋泉社、同『ゴシップと醜聞』2001 洋泉社。
- (11) 玉木 明(前掲)『言語としてのニュー・ジャーナリズム』
- (12) たとえば、安政江戸大地震(安政2(1855)年)のかわら版をみると、被災状況を描いた絵図には、画工の名が入っているのに、記事の方は無署名だ。ただし、弘化4(1847)年の「信濃国大地震山川崩激之図」(中山永之輔『かわら版選集』1972 人文社)のように、版元と書店が記された例もあるが、永久保存版というのか、厳密なかわら版ではないとされる。
- (13) 井上隆明『落首文芸史』1988 高文堂新書
- (14) 藺田香融校注・解説『最澄』日本思想大系4 1974 岩波書店
- (15) 藺田香融『平安佛教の研究』1981 法蔵館ほか。
- (16) 当時まだ若かった創元社の編集者猪口教行から、「おもしろい新発見があるようですよ」と事前に耳打ちされていたので、小さな見出しの書評が目

とまった。

- (17) いっぱんに「日付のない文化記事」が、生きのいい「日付のある事件記事」と競合して、これを押しよけ、社会面に大きく割りこむのはむずかしい。さいわい、長い選挙報道が終わって日常の紙面に復したい、けれど、出稿部門が選挙に忙殺されて一般記事が薄いという端境期が、チャンスになる。そこで、タイミングを見計らって出稿した。

それなら、なぜ、はじめから大きなスペースが確実にとれる学芸(文化)面ではなく、不確定な社会面にこだわったかといえば、ニュースの内容が宗教・文化界に躊躇するテーマではなく、広く社会的な関心事であること、そして閲読率(新聞の、いわば視聴率)の高くインパクトの強い紙面で、多くの読者の目に留めていただきたかったこと、この2点からである。学芸面に載る場合は署名記事になるので、個人的な晴れがましさと満足度は高いけれど、私は記事の衝撃力の方を選んだ。

その後もう一度、同じことをした。東京国立博物館の法隆寺宝物館にある南海産の「香木」から、古代史の東野治之(当時大阪大学)がイラン中世(7世紀)のパフラヴィー文字の刻印とソグド文字の焼き印を発見したときである。

忘れもしない、古代史家岸俊男(檀原考古学研究所所長)の告別式の当日、東野から「喜んでもらえることがあります」と耳打ちされた。数日後、東京国立博物館の紀要『ミュージアム』433号(1987-4)が送られきた。東野の論文「法隆寺献納宝物 香木の銘文と古代の香料貿易」と、両文字の解説にあたった吉田豊と熊本裕(ともに当時、四天王寺国際仏教大学講師)の報文が掲載されていた。東野に取材のうえ、競合するニュースが少ないゴールデンウィークをねらって、87年5月5日付け朝刊用に出稿した。こんどは第1面のトップ記事として大々的に報道された。のちに、東博・法隆寺宝物館の浅井和春から解説を受け、これこそ正倉院の「蘭奢待」とならぶ天下の名香「法隆寺」と知った。

当時、シルクロード・ブームにわいていた。奈良時代におけるペルシア文化の伝来とペルシア人の渡来をめぐって、イラン学の井本英一・伊藤義教がつつぎと新説を発表し、東洋史家の石田幹之助、作家の松本清張の渡來說を補強し発展させた。その折しも、正倉院宝物より一時代前の法隆寺宝物のなかから、東野が中世イランの文字を発見したというのだから、タイミングとして絶妙、大ニュースである。はたして、NHK ラジオの特番で松本清張と井本英一、美術史家杉山二郎の三氏が緊急鼎談し、「87年前半期最大の発見」と折り紙をつけた。

- (18) 木村周照の研究の動機が、宗門人らしく真摯で興味深い。30年後、木村じしんが『照千一隅論攷——伝教大師最澄の真意を問う』2002 青史出版をま

とめ、いきさつを述べている。私も新聞や旧著『古代の光—歴史万華鏡』1997 三五館で紹介したが、これも新聞がからむので、要点を再掲する。

司馬遼太郎の歴史小説『峠』(1966-68)は、明治維新のさい、心ならずも新政府との「戊辰北越戦争」におこまれた、越後長岡藩の家老・河井継之助の生涯をえがいた名作である。毎日新聞に連載中、継之助の男らしい生き方が共感をよび、NHKの大河ドラマにもなり、つい最近(2005年12月)もテレビドラマにリメイクされた。

継之助は、開港地長崎などで見聞を広め、越後に帰る途中、琵琶湖畔から比叡山を仰ぎみた。そして、伝教大師について、「一隅を照らす人間を愛した、尻の穴の小さな小器量者だ」と批判した。おそらく司馬が「闊達な快男子継之助なら、こうもいったろう」と推測し、その心情に仮託した批評だったろう。しかし、天台宗の関係者には大きなショックをあたえたようだ。のちにNHKの大河ドラマで原作どおり放映されると、天台宗は「宗祖を貶めるもの」と、NHK 大津放送局に抗議している。

それより早く『峠』を読んだ木村周照は、「お大師様はそんなお方であろうはずがない」と悲憤慷慨し、宗祖の名誉を挽回しようと奮奮した。「山家学生式」の直筆を調べ、名言の典拠である『史記』や仏典にあたった結果、筆跡上も論理上も、「照千一隅」と読むべきことをつきとめた。大師のかかげた人材養成の目標は、「〈一隅を照らす〉珠玉的な小人物」ではなく、「〈千里を照らす〉良将的な大人物」であったのだ。追究の結果は1969年、天台宗の宗報に発表され、木村も「大師の名誉は回復される」と安堵した。

しかし、このとき「一隅運動」をすすめる天台宗の見解は、変わらなかった、という。

- (19) 大久保良順「『一隅を照らす』は最澄の言葉ではない」毎日新聞2000年8月18日付け夕刊文化面。

ただし、天台宗では、その後も「一隅を照らす運動」を展開し、ホームページでつぎのように呼びかけている。「〈一隅を照らす運動〉は、伝教大師のご精神を現代に生かし、一人ひとりが自らの心を高めて豊かな人間になり、明るい社会を築いていこうということを目的に、1969年より始めました。／あなたが、あなたの置かれている場所や立場で、ベストを尽くして照らして下さい。あなたが光れば、あなたのお隣も光ります。町や社会が光ります。小さな光が集まって、日本を、世界を、やがて地球を照らします。／一隅を照らして下さい」。

- (20) 網野善彦『増補無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和』1996 平凡社ライブラリー版。とくに「十三 市と宿」の章。
- (21) 鈴木淳史『美しい日本の掲示板—インターネット掲示板の文化論』2003 洋泉社。上蘭美樹「巨大看板にハマる日本人気質—〈2ちゃんねる〉の社

- 会史的考察」『京都学園大学人間文化学部学生論集2005年度』2006 京都学園大学人間文化学部など。
- (22) 水野敬三郎・戸田禎佑・高階秀爾「芸術家の署名」（日本美術全集 第10巻『運慶と快慶—鎌倉の建築・彫刻』1991 講談社）
- (23) それより早く飛鳥時代(623年)、法隆寺釈迦三尊像の光背銘に「止利仏師」の名が刻まれた。しかし、これも発願の趣旨を刻んだ願文に属するらしい。
- (24) 大岡 信「日本の中世歌謡—〈明い虚無〉の背景をなすもの」『日本の詩歌』1995 講談社(岩波現代文庫版2005), 『歌謡そして漢詩文』1999 岩波書店にそれぞれ所収。引用は後者による。
- (25) 網野善彦『前掲書』1978 平凡社選書版
- (26) 上島有編『東寺百合文書を読む』1998 思文閣出版, 酒井紀美『中世のうわさ—情報伝達のしくみ』1997 吉川弘文館
- (27)(28)(29) 酒井紀美『前掲書』(注26)
- (30) 松浦静山1821-41『甲子夜話』2 日本随筆大成 吉川弘文館, 大田南畝『一話一言』45 同
- (31) 鈴木棠三編『落首辞典』1982 東京堂出版
- (32) 川平ひとし「署名する定家, 装われるテキスト—仮託書論の一視角」錦仁他編著『「偽書」の生成—中世的思考と表現』2003 森話社
- (33) 松浦静山『前掲書』
- (34) 本居宣長全集『古事記伝巻十八』筑摩書房
- (35) 「諱に関する疑」帝国学士院第一部論文集第二号 1919, 『実名敬避俗研究』1926 刀江書院。ただし、ここでの引用は、嫡孫のイギリス史家・穂積重行が口語訳した講談社学術文庫版『忌み名の研究』1992による。
- (36) 豊田国夫『名前の禁忌習俗』講談社学術文庫 1988
- (37) 月本明男「ヤウエ」『日本大百科全書』23 1988 小学館
- (38) J. G. フレーザー(永橋卓介訳)『金枝篇』第22章「タブーとされる言葉」1966 岩波文庫(改版)
- (39) D. J. Boorstin, *The Image; or, What Happened to the American Dream*, Pelican Books 1963(邦訳: ブーアスティン, 星野郁美・後藤和彦訳『幻影の時代—マスコミが製造する事実』1964 東京創元社)
- (40) 泣菫は大正元年8月、大阪毎日新聞社に再入社し(明治33年入社, 入社の際を新聞に発表した, 第1詩集『暮笛集』を出した大阪・金尾文淵堂の文芸誌編集に専念するため, 翌年, 退社していた), 同5年8月, 学芸部長になった。その間(1916.4.12~19.8.31)コラム『茶話』を朝・夕刊紙上に無署名で連載した。書評家・コラムニストの谷沢永一によると, 明治の正岡子規『病床六尺』, 昭和戦後の高田保『ぶらりひょうたん』とともに, 「日本新聞史上の三大コラム」に数えられるという。

- (41) 薄田泣菫『完本 茶話』上(谷沢永一・浦西和彦編)富山房百科文庫37
1983。ちなみに、『茶話』は大好評を博したから、連載中からつぎつきと本
にまとめられ、その後も大毎・東日、創元社など出版社を代えて都合10種の
版が出た。上の富山房百科文庫版は大阪毎日新聞のみならず、その後、1922
年から30年までサンデー毎日、東京日日新聞などに断続的に書き継がれた
「茶話」全811篇を集成している。
- (42) 藤原茂樹「みこともち」西村亨編『折口信夫事典』1988 大修館書店、吉
田修作「みこともち論」『ことばの呪性と生成——混沌からの声』1996 お
うふう。
- (43) M. ウェーバー(大塚久雄訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の
精神』1989 岩波文庫、青山秀夫『マックス・ウェーバー——基督教的ヒ
ューマニズムと現代』1951 岩波新書、牧野雅彦『マックス・ウェーバー入
門』2006 平凡社新書。
- (補注) 瀬田勝哉「神判と検断」『日本の社会史』5 1987 岩波書店